

# 付け加えることができる価値は何か？

～ パールハーバーメモリアルと日本人 ～

9

千葉 晃央

## 石油タンクは減り、「原子力」へ

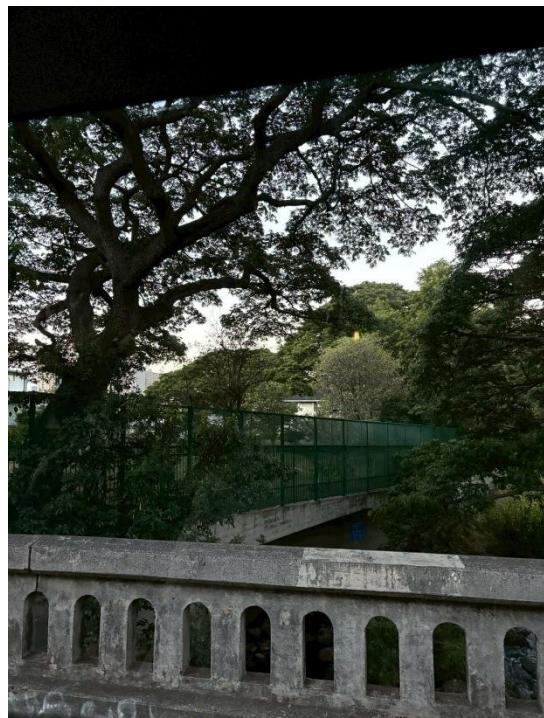
朝、5時50分集合。ハワイの産業のトップである軍需関連産業で、その中心となる基地「パールハーバー・ヒッカム統合基地（Joint Base Pearl Harbor-Hickam）」方面へ車で向かう。なぜ、こんなにはやいかというと、オアフ島の移動は車が中心で、通勤渋滞があるからである。

車異動の途中、「ここからはこのずっと向こうまで基地です！」との日系人である案内をしてくれた方の声。かなり広い。そこには大きな平たい円柱形の施設がある。それは石油タンクとのこと。今は9つタン



クがある。しかし、以前は26もあったそうである。そのぐらい軍の技術は進み、燃費も向上している。そして、石油ではなく、原子力にも置き換わっているとのことであった。この基地の敷地内には軍人の住宅もあり、ゴルフ場もあった。

道中、日本領事館に立ち寄る。奇襲だった真珠湾攻撃のときも、ここに日本領事館が



あり、FBI (Federal Bureau of Investigation:連邦捜査局) は、日本の動きを探っていた。そのため領事館職員等も目立つような大きな出入りはできない。日本領事館もアメリカ軍の基地の動向は常に監視していた。ただ、その情報を領事館からどう持ち出すのかが課題であった。その解決策として日本領事館から地下トンネルを掘り、領事館横の河川の土手に抜けることができた。その河川にボートをつけて、人が入りして情報を伝達していた。しかし、ハワイは火山島。土地岩盤はかたく、トンネルは人が這って出るのが精いっぱいの高さだった。

ハワイの基地は海軍と空軍の合同基地で規模が大きい。その一部が「パールハーバーメモリアル」として、真珠湾攻撃の被害、アメリカ軍の活動等を伝えている。

パールハーバーメモリアルで働く人々も軍人である。元有名教官だった軍人もいる。ツーリストにとって、ハワイの第二言語が日本語といわれるぐらい、日本語表記が街に溢れている。しかし、ここでは一切日本語表記はない。その中で日本語による音声ガイド機器は準備されている。入場時には基地なので透明なバッグに必要最低限のものを持ち込める。その荷物は入り口で軍人に確認される。入場すると右手に U S S ボー・フィン潜水艦福物館(別途有料)。奥には日本の海の特攻兵器人間魚雷こと「回天」もある。その横には米軍の沈められた戦艦一隻一隻に写真入りの碑が立てられていた。碑には艦の活躍とその終焉、被害者の数も記されている。

入場口の左手には真珠湾攻撃の記録の展示館がある。入り口には日本の戦闘機(模型)が天井からぶら下がり、真珠湾攻撃で行



われた魚雷発射態勢が表現されている。展示では、日本がいかに太平洋地域で覇権を拡大していくのかについて、図表も映像も用いて示されていた。その具体例として空母の模型も複数あり、甲板には複数の艦載機の模型もあり、その数も伝えていた。



## 戦艦アリゾナ・メモリアル

この建物はパールハーバーメモリアル内海上にあり、行くにはフェリーに乗船する。



その運航も軍が行っている。

乗船前にはブリーフィングルームで10代の女性が自分のルーツの方々がここで亡くなった話をしていた。合わせて真珠湾攻撃の説明をその彼女が行い、乗船予定者は全員がこの一連の話を学んで乗船した。話が終わると会場は拍手に包まれていた。

戦艦アリゾナ・メモリアルは祈念施設である。沈んだ戦艦アリゾナは今もその艦体の一部が海上に出ており、全体も海面下に見えている。その上に、戦艦アリゾナで亡くなった兵士の命に敬意を払い、祈念施設が



立てられた。白い建物の中央には星条旗が掲げられ、現在も海中のアリゾナから油が漏れしており、海面にはその油膜が表れている。これは「アリゾナの涙」と呼ばれている。建物の中の祭壇には亡くなった兵士の名前が千何百びっしりと刻まれていた。

また生き延びたアリゾナの戦艦乗組員が終戦後、天寿を全うし、その遺灰の一部を海中の艦内に家族によって戻されたエピソードも紹介されていた。海中で昔の仲間とも再会し、永遠の眠りについたということである。



このパールハーバーメモリアルは、アジア人の来場者が少ない印象であった。別日に訪れた方にきいても同様の印象であった。私が訪れたこの日は、日本語を話している人が1割ぐらいいた。日本人は、ここではいわゆる「加害者側」の立場である。国内のこうした平和関連施設とは逆の立場ともいえる。広島平和記念公園、原爆ドームなどでは外国の方々をお見掛けしてきたが、反対

の立場の経験である。こうした経験もしておかべきであると個人的には感じている。



## 降伏文書、神風特攻、戦艦ミズーリ

戦艦ミズーリメモリアルも訪ねる。ミズーリは日本降伏文書の調印式を行った戦艦である。そして、神風アタックを受けてもいる。その後、改装もしながら湾岸戦争まで使われた。砲塔の射程距離は42キロ。3門独立で動き、一つの砲台に90名程度が従事する。その砲台には撃破数として戦果マーキングと思しき数字もあった。

甲板には降伏文書が調印されたところが示されている。調印時の日本の代表は重光葵。暗殺未遂事件に遭っていて、当時は義足を利用していた。調印式では、その重光を想定し、時間配分を検討。その想定練習をアメリカ軍は行った。そこではある兵士がズボンにデッキブラシを入れて、義足による移



動時間をシミュレーションしたそうである。なぜなら軍艦の内部は戦艦でありバリアだらけだったからである。それでも当日は想定以上に調印まで時間がかかり、遅れて式が行われたそうである。文書署名ではサインを書くところを間違えてずれてしまうハプニングも発生。文書の書き直しを日本は主張したが認められず、訂正がなされたものが今に残っている。



## 特別攻撃部隊の跡



1945年ミズーリへの神風特攻隊による特別攻撃機には誰が搭乗していたかも2名まで絞られている。特攻後、ご遺体は甲板にあったそうである。そのご遺体を当時の艦長は「敵であったも尊敬すべし」として、日章旗を徹夜で手縫いさせて、アメリカ海軍による水葬式を行ったことも紹介されていた。痕跡は写真のように僅かな歪みがある。

ミズーリの甲板後方のスペースではイベントも行われていた。楽器演奏もあり、いかにも海軍である。このミズーリはミニッツ級の戦艦といわれ、ミニッツはアメリカ軍の有名な軍人である。ミニッツは海軍士官学校に入り、軍人に必要なことを学んだ。そこでは「東郷平八郎」についても学んでいる。その後、ミニッツは東郷平八郎が用いた軍艦の保全にも寄与している。



航空特攻隊員の制服

旧日本帝国陸軍の航空特攻隊員は、このような装備を身につけていました。皮製で毛裏の飛行帽子と飛行メガネのうち、帽子は羊皮とウサギの毛で作られています。飛行服の上に着たベストは、熱帯地方の植物の実からとれるカボック繊維が詰められていて、水中で浮力を得ることができます。同じく皮製の手袋と、ゴム底で黒い皮製の飛行靴を身につければ、航空特攻隊員の制服となります。

神風特攻飛行員制服

此模特身着帝国陆军神风特攻飞行员头戴皮质翻毛飞行头盔并配有航空护目镜似为羊皮所制，内衬翻毛则为兔皮，救生背心，其填充材质为木棉，此种植物纤维能在水中提供浮力，全套飞行动作手套和胶底皮靴。